

万葉研究の方法について

久 松 潜 一

万葉研究の方法は種々あつてよい。たゞ研究者が自分の体験によつて得た研究者の身についた方法でありたい。他の人によつて主張され、もしくは時代の傾向によつて盛んになつた方法をとりに入れるだけでは身についた方法とはなり得ない。これは日本文学の研究の方法全体にわたることであろうが、万葉集だけについてもそのことが言える。またそういう真に身についた方法を確立することは容易でない。亡くなられた沢瀉博士が訓詁一筋に生涯の万葉研究を貫いて来られたのはその点だけでも敬仰される。

こゝで私も自分の万葉研究を方法の上で顧みて見たいのであるが、まことに廻り道ばかりして来たようである。私は高等学校の生徒であつた頃は、文学青年で種々の作品を読み散らして来た。その中、三年になつて国語の山内二郎先生から一年間、万葉の講読を受けた。先生は註釈一点張りという風であつた。そうして註釈家としての契沖を非常に推賞された。教材は博文館発行の和歌叢書本を用いていられた。それは千蔭の万葉集略解を底本として簡単な頭註を加えた本であつた。私はこの本で読むとともに図書館で契沖の万葉代匠記を見つけて参考にした。それは木村正辞博士の校訂した本であつた。大学に入って佐佐木信綱先生から万葉集の講読を聴講したが、同じ万葉集略解を用いられていた。この和歌叢書本は芳賀、佐佐木両博士の校訂であつた。契沖を卒業論文に書くことにしたので万葉代匠記は更に繰返し読んだ。ところが大学図書館で調べると万葉代匠記の写本があるので、それを読むと木村博士校訂の刊

本とは随分異なっている。それから更に代匠記の写本を見ると大体同じであり、刊本とは異なっている。それで調べてゆくと代匠記の多くの写本は初稿本系統で、刊本は精撰本系統であることを知った。こんな事から書誌学的研究に対しても興味を覚えるようになり、調べてゆくと種々の事実がわかって来る。三年の時、真淵の百五十年記念の事業があり、心の花で真淵特集号を出すので何か書けと佐佐木先生から言われ、契沖と春満と真淵との関係を万葉代匠記と春満の万葉僻案抄との関聯の上から説いた小文を書いた。これは卒業論文の一部とした。

大学を卒業する頃、佐佐木先生からすゝめられて国語研究室で継続して行われていた校本万葉集の仕事に関係するようになり、本文批評という方法にも深い関心をもった。もともと私の分担したのは二十数種の万葉註釈書から本文批評や訓に於ける新説を集めることであつたので、直接に桂本や金沢本万葉集や元暦校本万葉集や西本願寺本などの諸本の本文校訂を行つたのではない。しかし本文の異同やそのいずれが原本文に近いかという本文批評の目標は十分身近な問題であつた。

このような経過から私は万葉集研究と言つても書誌学的方面や本文批評や註釈の方面に深入りするようになり、万葉集の文献学的研究に力を入れることになつた。しかし私の日本文学の研究に志したはじめは文学としての研究であつたので、その中、大学で上代文学の講義をすることになつた時は、万葉集の文学的研究をまとめて見ようと思つた。私の考える文学的研究というのは文学批評的研究と文学史的研究とを相関的に扱うといふことであつたので万葉集をもこの立場から扱つて見たいと思つた。その最初の講義ノートを大正の末に「万葉集の新研究」として刊行した。それは貧しいものではあつたが、当時はこういう種類のものは万葉集研究としては殆ど無かつたので広く読まれた。島木赤彦の万葉集の鑑賞及批評がほぼ同時に世に出たがそれは万葉集の批評・鑑賞的研究と言ふべきであつた。それより以前に世に出た窪田空穂氏の万葉集選もそれと近い性質の書であつた。私はそれに文学史的立場を加え、両者を相関的に扱つて見たのであつた。更に昭和十年頃欧米に遊んでその国々の歴史や風土の特色を身を以て感じてからは万葉集の研究に於ても歴史や風土、特に風土と文学との関聯を見ようとした。文学地理学という点について書いたのもその頃であつた。こうして私は万葉集を扱うに當つて、資料的研究としての書誌学や本文批評や註釈の研究、地盤的研究としての歴史や風土と文学との関聯の研究、文学的研究としての文学批評と文学史とを統一づけた研究と

の三方面の研究をとりあげて扱うことになった。それ多くの研究を方法体系として位置づけるために三重構造と名づけて見たりしている。そういう態度や方法がどこまで学問的であり得るかということとは具体的な研究の上で検討して見なければならぬ。私などは方法の上でも対象の上でも長い遍歴の旅をつどけていくわけであり、その間に自分の身についた方法を確立しようとはしているがどれだけ身についたものになったかはわからない。